

テモテへの手紙第二 3 章をお開きください。1 節に『終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。』今は終わりの日であります。終末時代、世の終りと言われる時代、それは私たちの時代であります。私たちの世代のことを言います。まあ、そのことを今いろんな預言の成就を通して皆さんに証明することも出来ますし、また終わりの時代の特徴もこの後 2 節以降見ることとなりますので、確かにここを読むと、今は終わりの日に違いないと、確信できると思います。で、このような終わりの日の前兆というのはイエス・キリストもすでに述べられているところでありまして、パウロという人は、そのイエス・キリストの世の終わりの前兆の預言について、それを踏まえた上で、パウロの時代もまさに終わりの時代に突入しているということ、イエス・キリストがいつ戻って来られてもおかしくないということを、彼自身も肌で感じていたと思われまます。とりわけ、もうこの後 1 年も経たない内にパウロは皇帝ネロによって首をはねられ、断首刑で殉教するというのも、もうこのことも彼は予見し、覚悟していたところでもあります。でも、パウロは結局死んでしまって、彼の時代にも、彼の後の時代にも、イエス・キリストが戻って来られて、世の終わりが成就したということはないかと、皆さんは思ってしまうかもしれません。私はよく皆さんに「今が世の終わりである。」と、イエス・キリストがいつ戻って来られてもおかしくないで、切迫感を持って、または期待を持って、希望を持って、イエス・キリストが迎えに来られる日、つまり携挙を待ち望むようにと繰り返し繰り返し強調して宣べ伝えてはいますが、でもパウロことを考えると、「パウロだってそのように考えたけれども、結局彼の生きている時代にはイエスは戻って来られなかったし。それ以来もう二千年も経っているけれども、いつまで経っても世の終わりというのは来ないではないかと。パウロは間違っていたのではないかと。」皆さん思うと思いますし、私も間違えるかもしれないじゃないかと皆さん思われると思いますが。まあ、私は間違っていないと思うんですけど、でも、たとえ間違っていたとしても、私も本気で自分が生きている間にイエス・キリストが戻って来られるということを信じています。でも、それがたとえ間違っていたとしても私はそれでも構いません。私はパウロの仲間になりたいと思います。私はアウグスティヌスや、マルティン・ルターや、ジャン・カルバンや、またスポルジョンや、ムーディーや、フィニーといった歴史上に偉大な足跡を残したクリスチャンたちの仲間入りを果たしたいと思います。彼らもまた自分たちの生きている時代にイエス・キリストが戻って来られるということを本気で信じていたわけですが、でも実際には彼らは亡くなっているわけです。ですから彼らの時代には、当然イエス・キリストは戻って来られなかったわけです。にもかかわらず、彼らは偉大な信仰の歩みを、その足跡を残したわけです。模範的なクリスチャンとして、彼らは今でも語り継がれているわけでありまます。もし、私たちが彼らのようになりたいと願うならば、彼らと同じように、彼らと同じキリストの携挙を、または空中再臨というものを、待望する者として、この地上で信仰生活を送るべきであります。実際に第一ヨハネ 3 章のところにこういう言葉があります。2 節から読みたいと思います。『²愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら（これが携挙のことです。）私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。³キリストに対するこの望みをいだく者は（携挙の希望を抱く者は）みな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。』自分が生きている間にイエス・キリストが絶対戻って来られる、というその希望を持っている者は、自分を清くすると。清い歩みを地上で送ることが出来るという約束がここにあります。もし、私たちがこの地上でキリストが清くあられるように、自分もまた清い生涯を歩みたいと願うならば、

今が世の終わりであるということを感じて頂いて、そして本気でイエス・キリストが私たちの生きている間に、今日かもしれない、今晚かもしれない、明日かもしれない、そのような切迫感を持ってキリストを待ち望む。携拳を心の底から待ち望む。そうすることによって私たちは自分自身を清くすることが出来ます。

で、逆に「まだイエスは戻って来られない。」というふうに思うならば、これもイエス・キリストが指摘しているところですけども、**マタイの福音書**の方に今度は目を留めて頂きたいと思います。**マタイの福音書の24章**は、イエスが世の終わりの前兆について語っておられるところです。で、目を留めて頂きたいのは終わりの**45節**からです。『⁴⁵主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいどれでしょうか。⁴⁶主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。(これは主人であるイエス・キリストが戻って来られる。そのことをいつも予期し、いつも期待し、まさにいつ戻って来ても良いように準備万端整えておく。切迫感を持って主人が戻って来られるのを常に待ち構えている人です。それが“賢いしもべ”であるということです。で、そのように待ち望んでいる者は幸いですと言われていました。)⁴⁷まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。(その一方で)⁴⁸ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい。』と心の中で思い、⁴⁹その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、⁵⁰そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。⁵¹そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。』「イエスはまだまだ戻って来られない。」と、心の中で思い、仲間を打ちたたき、「携拳なんて本気で信じてるのか。空中再臨なんて本気で信じているのか。聖書を文字通り捉える狂信者たちめ。キリスト教の原理主義者たちめ。ファンダメンタリストたちめ。狂信的だ。偏っている。気が狂っている。神学が偏っている。」まあ、そのように仲間を打ち叩く者たちがあります。そして酒飲みたちと飲んだり食べたりしていると。文字通り酒に酔っている者もあるでしょうし、でもここでは象徴的に現世を謳歌しているわけです。「まだまだイエスは戻って来られない。」だから自分たちの好きなように快樂や娛樂にふけり、そしてこの世の享樂を面白おかしく楽しんでいる姿であります。しかしイエス・キリストは思いがけない日の思わぬ時に帰って来られるものであります。泣いて歯ぎしりしたくないと思うならば、私たちは悪いしもべではなく、良いしもべ、賢い忠実なしもべになるべきであります。

で、今の話を踏まえながら、今は世の終わりであります。イエス・キリストがいつ戻って来られてもおかしくない時代。それはパウロに言わせれば困難な時代であると言われていています。で、イエス・キリストも先ほど開いた**マタイの24章**でも、それが確かに困難な時代であると宣べられています。いろんなもちろん天変地異のようなことも起こりますし、また偽預言者という人たちも、また偽キリストと呼ばれる人たちも大勢現れます。そして何よりもその時代は愛が冷めてしまう時代。神への愛が冷めてしまう。御言葉に対する愛も冷めてしまう。まあ、そういう時代であるということが**マタイ24章**でイエスの口からも語られています。パウロはもちろんその教えを額面通り受け止めて、自分の生きている時代にも当てはめて、今はまさに世の終わりであると。イエス・キリストが二千年前にこの世に来られた時点から世の終わりはもうスタートしているわけですが。ただ本格的な世の終わりを見るのはイエス・キリストが言われたひとつの印。それはイスラエルという国が再び興るといふイスラエルの再建。それは私たちの時代、20世紀に、厳密には1948年5月14日イスラエル共和国が独立したその出来事を通して本格的な世の終わりの最後のファイナルカウントダウンがもう始まっているわけであります。その時点からもうイエスがいつ戻って来られてもおかしくないということが、パウロの時代よりもさらに鮮明に、更に確実になったわけであります。二千年も経ったと思うかもしれませんが、神の目には1日は千年のようであり、千年は1日のようでありますから、たった2日しか経っていないだけのことです。私たちと、神の永遠の尺度で、感覚で考

えるならば、そこには大差はないということです。二千年も、と思うかもしれませんがたった2日という見方も出来るわけであります。神は約束のことを遅らせておられるのではありません。一人でも多くの人が悔い改めに進んで救われること、それが神の御心であります。ですから私はしっかりと神の御心も心に留めながら、今の時代を見極めつつ、今は世の終わりの時代です。もう後がないと思ってください。焦る必要はありませんけども、怖がる必要もありませんけれども、ただこれが事実であります。現実はまだ着実に世の終わりはファイナルカウントダウンに入って、イエスがいつ戻って来られてもおかしくない時代に入っています。イエス・キリトを信じる私たちは、そのまま生きている場合は、空中に引き上げられ携挙を体験します。たとえこの世の命が尽きたとしても、私たちはもう目を閉じて次の瞬間目を覚ました時には、イエスの御顔を見る、天国に自分を見出すという素晴らしい約束が与えられていますので、クリスチャンには何の不安も心配もありません。ただ救われていない者たちのことを思うと私たちは安心してはいられません。安逸をむさぼっているわけにはいかないわけです。もう私は天国に行くだけだから。でもあなたは良くて、あなたの愛する家族はどうでしょうか。いつかイエス・キリトを信じてくれたらいいなあ、と希望的観測を持っているかもしれませんが、そのいつかはいつなんでしょうか。もし今日イエス・キリストが戻って来られるならば、そのいつかはもう来ないかもしれないんです。携挙の後でも反キリストが現れて、そして7年間の患難時代がこの世を襲いますけれども、その間にも救われる者たちは確かに現れる、ということは黙示録を通して私たちは確かに知ることが出来ます。でも、その数は少ないと思います。そして、今は恵みの日、恵みの時代であります。患難時代は、そうはいかないということです。イエスを信じたら、間違いなく弾圧されます。間違いなく迫害されます。間違いなく殉教します。今は、とりわけこの日本においては、クリスチャンになったところで別に財産を失うこともなければ、家族を失うこともなければ、命を失うこともないと思います。ちょっとした嫌がらせや、ちょっとした言いがかり、心ない言葉や汚い言葉を浴びせられることはあるかもしれませんが、多少は不遇な目に遭うかもしれませんが、でも、患難時代と比べるならば、蚊に刺されたようなものであります。ですから、その時代に、患難時代にイエスを信じるというのは困難極まりないわけです。まだ今の時代の方が、よっぽどある意味救われやすい、信じやすい、クリスチャンとして歩みやすいと言って良いと思います。まあ、現状として日本以外の様々な国では、イスラム圏をはじめ共産圏や政情が不安定なところでは、よくクリスチャンは弾圧されることもあります。確かに今でもその信仰の故に命を奪われている者たちもあります。でも、それも患難時代と比べるならば大した事ないと思ってしまうほど患難時代はまさに文字通りの患難。非常に苦しく恐ろしい時代であるわけです。

で、また話を戻していききたいと思います。その患難時代に近づけば近づくほど時代は困難になっていくのは必定であります。1節には『**終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。**』もうイエス・キリストが戻って来られたら、その直後から患難時代という最後の7年間が始まるわけです。キリストを拒絶する罪の世界に対して神の怒りが露^{あらわ}に現れる。そういう時代がもう近づいているので、まさにそれが近いということを時代が困難になるにつれて私たちは肌で感じられるようになるわけです。有り難いことにそのような前兆があるので私たちは、この時代はもう既に世の終わりであって、福音宣教は急務である。イエス・キリストが戻って来られる前に、この恵みの時代にどんどん福音を伝えて行かなければ、特に愛する者たちに福音を明確に伝えて、そして明確な決断を促さなければ、「いつか信じます。考えておきます。そのうちに。死ぬ前には。」そんな悠長なことは言ってもらえないということを、私たちはこの時代を知る者として、今がどういう時代なのかを理解している者として、決して許してはならないのであります。ハイか、イイエか。信じるか、信じないか。永遠の命か、永遠の滅びか。天国か、地獄か。脅すわけではないですけど、でももう即断しなければいけないような時代に入っているということは事実であります。即決しなければ、もう明日がないかもしれない。後がないかもしれない。それが今の特殊な

時代であります。

で、この“困難”という言葉は、ギリシャ語では“ハレポース” chalepos と言います。”ハレポース”という言葉は文字通りは、「力をなくす」力がだんだんなくなっていくその様を指しています。そこから転じて、困難とか、難しい、厳しい、激しい、過酷である、残酷である、極めて危険である、という意味が生じたわけであります。それが“ハレポース”という言葉です。困難、難しい、厳しい、激しい、過酷、残酷、極めて危険である。「力をなくす」という言葉からそのような意味が生じています。

で、この“ハレポース”という言葉は、新約聖書ではこの箇所と、もう1カ所**マタイ 8:28**のみ使われている、たった2回しか使われていない用語であります。『それから、向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人がふたり墓から出て来て、イエスに出会った。彼らはひどく**狂暴**（ハレポース）、だれもその道を通れないほどであった。』悪霊に取り憑かれた狂人です。2人は狂暴であった。これが“ハレポース”です。ですから『終わりの日には、**狂暴な時代**がやってくることをよく承知しておきなさい。』と訳しても差し支えないわけです。まるで悪霊に取り憑かれたかのような、気が狂っているような、そういう時代になると。**第一テモテ 4:1**を今度は開いて見て下さい。同じ**第一テモテ**方では、既に世の終わりの時代の前兆についてパウロは触れておりました。『しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると（これは世の終わりのことです。）、ある人たちは**惑わす霊と悪霊の教え**とに心を奪われ、信仰から離れるようになります。』これもイエスが**マタイ 24**章で言及されていた世の終わりの前兆であります。大勢の偽預言者、大勢の偽キリストが現れるということです。で、彼らは惑わす霊、悪霊の教えを持ち込む者たちであります。ですから、この困難な時代、まるで悪霊に取り憑かれたような**狂暴な時代**。それは悪霊の教えをもたらす者たちが**闊歩**する時代。教会の中にも彼らが入り込んで、彼らの悪霊の教えが蔓延してしまう、横行してしまう。そういう時代が、終わりの日である、世の終わりであると言っているわけであります。皆さんはこのことをよく承知して頂きたいと思います。

で、テキストの**第二テモテ 3:2**以降はまさに世の終わりの時代の特徴、世相も表しています。それはただ単に世知辛い世の中を超えています。極めて困難である。狂暴、難しいどころか、もう厳しすぎるような、激しすぎるような、過酷で、残酷で、危険極まりない、そういう時代です。で、それはまさに悪霊の教えによるものだということも、覚えて頂きたいと思います。**2**節以降に見るのは、世の終わりの時代の特徴とともに、悪霊の教えの特徴。で、これはもちろん惑わす霊によるもので、聖霊によるものではありません。逆に、聖霊による教えは、聖霊の靈感によって書かれた聖書に基づく教えであります。**2**節以降にあるのは、非聖書的な教え。それはすべて悪霊の教えと断言出来るものです。聖霊の教えか、悪霊の教えか。そのどちらかです。聖書は神の言葉であって、普遍的な真理であります。真理は1つしかありません。この真理から外れたものは、皆真理ではないということです。それに惑わされてはいけません。それに**囚**われてはいけません。そのことをパウロはテモテに死を目前にして警告をしているところであります。事実、テモテの牧会するエペソの教会には、この**2**節以降に出てくるような者たちも多く見られた。ここで言われているような悪霊の教えが多く散見されたということです。

で、具体的にそのリストを見ていきたいと思ひます。**2**節に『²そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、³情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、⁴裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、⁵見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。』で、“こういう人々”というのが、既にテモテの牧会する教会の中にも入り込んでいたわけですから。**第一テモテ 1:3**のところでは『私がマケドニヤに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっています、ある人たちが違った教えを説いたり、』“違った教え”とは、パウロが教えていることとは違った教え。

パウロが教えたことは、聖霊によって靈感を受けたパウロの書簡です。パウロの手紙です。そのパウロ手紙、すなわち新約聖書とは違うそれに反する教えが既に入り込んでいたわけです。見えるところは敬虔である。まるで敬虔なクリスチャン。まるで神の人、神の器。有名な牧師や伝道者とか、見えるかもしれませんが、その実を否定する。“実を否定する者”という言葉は、直訳すると“力を否定する者”です。ですから、これも後で見たいと思いますけども、この力というのは、まさに御言葉から来る力です。御言葉によって変えられていく力。これを私たちは経験しているので、キリストに似る者となることに希望を持てるわけです。キリストは、生ける神の御言葉そのものです。言葉が受肉して、私たちの間に住まわれたわけです。そのイエス・キリストのようになれる。それは御言葉を学び、御言葉に従うことによって、実現されていくものです。もちろんその従う上でも聖霊が働いて、聖書にある通りこれは栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられていくのは、御霊なる主の働きであるということもパウロは語っているところがあります。力があるんです。私たちの力ではなく、聖霊の力、神の力が働く時、御言葉を信じ、御言葉に従う時に、その力は効力を発揮するわけです。

ところが、その力を否定する人たちは、聖書とは違ったメッセージを語るわけです。聖書の御言葉そのものに力があるということをごげずに、聖書以外のいろんな方法で、具体的にはグノーシス主義という悪霊の教え、当時の異端的な教えが蔓延していました。聖書以外の知識、聖書プラスアルファという特別な知識、神秘的な知識。それがあれば人は救われるし、ありとあらゆる問題も解決できる。まあ、そのような教え、違った教えがもう蔓延していたわけです。で、その違った教えから **2 節**以降に出てくるような人たちが現れてしまった。

で、今の時代にも、世の終わりの時代として、このことが確かに見られるわけです。テモテの時代よりも、パウロの時代よりも、もっと顕著になってきております。そのトップに挙げられているのが **2 節**の頭にある“自分を愛する者”です。“自分を愛する者”。で、最後に **4 節**の末尾に使われている言葉『**神よりも快樂を愛する者になり**』。“自分を愛する”という言葉に始まり“快樂を愛する”という言葉に終わるわけです。その間にいろいろな言葉が使われて、サンドイッチされていますけれども、まあ、これを一括りにまとめるならば、結局は、神を愛さない人たちということです。神を愛しないで、まず自分を愛する人たち。神を愛しないで、快樂を愛する人たち。それがこの **2 節**から **4 節**の中に挙げられている人たちのことを指すわけです。皆同義的に使われているということでもあります。いろんな言葉遣いがあります。いろんな種類の人たち、特徴が挙げられていますけれども、でも、とどのつまる所は、この人たちはただ単に自分を愛しているだけ、ただ単に神よりも快樂を愛しているだけで、神を全然愛していない人たち。見えるところは敬虔なんです。熱心なんです。立派なんです。人格者にも見えると思います。でも、彼らは御言葉そのものの力を信じないで、御言葉から外れ、御言葉以外のものに信仰を置く者たちであります。その実を否定する人たちであります。ただ順番も、もちろんこれは神の靈感によって書かれているわけですから、これも重要視したいと思います。トップに挙げられているものが最も困難なもの、最も難しい問題、最も厳しい、激しい、過酷で、残酷で、危険極まりない教えであるというふうには言えると思います。例えば愛の特徴が**第一コリント 13 : 4**にあるあの愛の定義です。愛は先ず何で始まりますか。寛容であると。愛の中で1番肝要なのは寛容だと。愛の中で最も特徴的なのは、先ず意識されるべき事は寛容である。

寛容さがなければ、もうそこには愛がないわけです。ですから、聖書的な愛、キリスト的な愛は、先ず寛容から入るわけです。寛容さに欠けたら、いくら親切でももう偽りの愛であるわけです。愛は寛容であり、愛は親切です。人をねたみません。いくら人をねたまなくても、寛容でなければアウトです。まあ、それと同じようにやはり順番も意識しながら、**第二テモテ 3 : 2**からのこの困難な時代の特徴を表すリストのトップを飾るのは“自分を愛する者”。これが1番厄介で、問題であるということです。ところがこの自分を愛するという言葉だけを抜き取って考える時、多くの人たちは、特にこの世の人たちは、これは大事

なことである。これこそが今の時代に必要とされている事。そのようにポジティブに、肯定的に受け止めてしまう、受け止めるべきフレーズだと思われると思います。まあ、実際に自己愛ということが心理学でも謳うたわれます。自分をもっと愛さなければいけない。自分の価値を、セルフ・イメージをもっと高めなければいけない。自己尊重しなければいけない。“セルフ・エスティーム”という言葉も最近では日本でも定着してきました。心理学の用語ですけども、これは学校の教育にも取り入れられているところでもあります。子どもたちを教育する上で、子供たちには自分の価値をもっと高いものとしてセルフ・イメージをもっと上げなければ、良い教育が出来ないというふうに彼らは考え、この心理学の教えをどんどん取り込んでいるところでもあります。ですから、この世においては、それは聞こえの良い教えであり、多くの人に歓迎される教えであるわけです。でも残念なことに、この自分を愛するという事は、キリスト教会の中にも取り入れられて、そしてクリスチャンたちも聖書から吟味することなく、何も疑うこともなく、ありとあらゆるところで受け入れられているから、あの有名な先生が説いているから、ベストセラーになったから、セミナーを開いて賑わって流行しているから。いろんな心の悩みを抱えている人たちが、精神の病を抱えている人たちが、その教えによって改善し、回復し、立ち直ることが出来たから。だから私たちも受け入れるべきであると。何も考えずに受け入れるべきであると。それが残念ながら今の日本の教会の風潮でもあり、特徴でもあると思います。聖書をもはや開いて吟味する、検証するという事は致しません。何もかも鵜呑みにしてしまう。でもパウロはこのことを警告しています。使徒 17:11『このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりがどうかと毎日聖書を調べた。』私たちは良い人たちでなければいけません。良い人たちとは非常に熱心に御言葉を聞くだけの者ではありません。それでは良い人たちではありません。良い人たちとは、そこにとどまらず、果たしてその通りかどうかと、たまにじゃなくて、毎日聖書調べる者が良い人たちであるとパウロは言っているわけです。また同じくパウロは、エペソ人への手紙、まさにパウロの後継者テモテが牧会しているそのエペソのクリスチャンたちに宛てた手紙の中でもこういう言葉を使っています。これはエペソ 4章 14節の言葉です。『¹⁴それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもあそばれたりすることがなく、¹⁵むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。』“人を欺く悪賢い策略”それが違った教えです。そのような違った教えの風に吹き回されてはならない。そのような流行の波に乗ってはならない。そうすればあなたはいつまでも安定しない状態で揺れ動いてしまう、確信が持てない、何が正しいのか何が間違っているのかも分からない。判定する、吟味する基準も持たないわけです。ですから、「あの先生がこう言ったから。」、でも次の年になったら、「また別の先生がまた違うことを言ったから。」いろんな教えに惑わされてしまうと、振り回されてしまうと。安定を欠いた状態になって、そしてもはや聖書を聞くことも出来なくなってしまいます。そうした違った教えの中でも、最も危険なのが、“自分を愛する”という教えであります。

『自分を愛する人、ありのままの自分を受け入れられる人が、ありのままの人を愛し、受け入れることが出来る。人への苛立ちは自分を愛する絶好のチャンス。人への苛立ちは自分を知る最良の手段です。あなたが受け入れていないもう一人の自分が、他人という鏡に映し出されているのです。引き出されたあなたは、本当のあなた。その自分をこよなく愛する時、自分を愛するように他者を愛することが出来ます。人間関係のコツは自分を愛することです。自分の素晴らしさに気づき、自分を愛することが出来た時、人間関係が変わり人生が輝き始めます。』

これを聞いて皆さんどう思われるでしょうか。「素晴らしい教えだと。耳障りが良い。聞いてて励まされ

るようだ。慰められるようだ。」そう感じるのでしょうか。今言った言葉は、山形県にある米沢興譲教会の田中信生牧師の言葉であります。皆さんも彼の名前はどこかで聞いたことがあると思います。日本で最も有名な牧師の1人です。かつては日本基督教団に属していました。お父さんも牧師だったんです。2代目の牧師ということで教会を引き継いだんですけども、彼は日本基督教団を出て、そしてホーリーネスの群れにもある時属したと言いますけれども、今は単立となっています。2013年7月29日の日付でアッセンブリー京都教会の牧師で村上密^{ひそか}という人があるブログの記事を出しました。この村上密という人は、日本のカルト問題では非常に有名な人で、京都の聖神中央教会のあの問題の時も彼がかなり活躍したわけですけども。またアッセンブリーといえばそのトップに君臨するのが世界最大の教会、韓国にあるヨイド教会です。チョー・ヨンギのことですけども。まあ、彼は同じアッセンブリーに属しながら、村上牧師はそのチョー・ヨンギの非聖書的な教えについても糾弾しています。その他の金銭スキャンダルについてもハッキリと身内でありながらも間違いは間違いとして断じるような人物でありますけれども、その村上密という人が出しているブログの中で、2013年7月29日のその見出しには「田中信生 その光と闇」という内容で次のように記されました。

『「田中信生」、「興譲教会」、「トータル・カウンセリング・スクール」と聞いて、何を連想するだろうか。田中信生氏は、華々しい活躍をした人物だけに、人々は彼の「光」に集まった。しかし、「闇」の部分を知って、多くの人々が失望し、傷つき去って行った。昔(1980年～1999年)、「ミッション2001青年宣教大会」を岸義紘氏を中心に、田中信生氏と大川従道氏他が始めた。後に中野雄一郎氏も加わっている。その彼らもある出来事をきっかけに田中氏から離れ去った。田中信生氏の本は、日本全国のキリスト教書店で販売されていた。(皆さんも目にしたことがあると思います。買った、プレゼントされたこともあるかもしれません。)しかし、いつの頃からか書棚から消えた。人が去る、友が去る、本が消える。何が起きているのだろうか。だれも詳しいことは知らない。言えるような出来事ではなかったからだ。しかし、秘密は隠し通せるものではない。少しずつ情報が漏れ出してきた。しかし、名前を出して告発する人は現れない。田中信生氏の名誉は一夜で墜ちると分かっているにもかかわらず、告発する人は再度傷ついてしまう。著名な人の告発には大きな代価を払わなければならない。それは、相手の築いた人脈と経済力を相手にするからだ。田中信生氏と関係の深い人は、彼の「闇」の部分を知らないなら、間違いなく彼を庇い、非難する人々を攻撃するだろう。被害を受け、深く傷ついた人々は、一人を相手にするのではない。再び、多数によって深く傷つけられることは避けたい。精神的にどこまで耐えられるか分からないからだ。だから、田中信生氏は生き残った。彼を信頼している人々と信頼したい人々によって、今も興譲教会は活動を続けている。全盛期は過ぎた。しかし、田中信生氏の下から去った人々にとっては心残りがある。田中信生氏は本当に悔い改めたのだろうか。彼の癒しがたい性癖は止んだのだろうか。(性癖という言葉が使われていますけども。セックス・スキャンダルのことを指しています。)もし、本当に悔い改めているならば、失望した人や被害者が去っても、友が去ることはない。キリスト教界から、「干される」事もない。彼の現在の活動は、彼を知らないで「光」に集まる人々、彼から離れて生活を再出発したくない人々によって支えられている。一つの事実をお伝えしたい。あるスタッフの女性が、田中信生氏との関係を続けることが苦しくなって、当時の女性寮の責任者に告白した。それから、次々と問題が発覚して行った。これを聞いた仙台ゴスペルハウスに集う人々が(このゴスペルハウスというのが田中信生氏が全国各地に作っているグループであります。)、これが事実ならゴスペルハウスを閉じると田中氏に通告してきた。彼は仙台へ行き、これを認め、謝罪している。仙台ゴスペルハウスは閉じられた。牧師の一つや二つではない不品行に呆れ果てた人は去って行った。

何が起きたのか分からない人と薄々分かっているけれども何も発言できない人だけが数人残って、現在の仙台ゴスペルハウスは数年後に再開された。本部である米沢の興譲教会の牧師たちは、この事実が本部教会内に広がらないように不祥事の隠ぺいをさせられている。確かに、悔い改めたら赦すように聖書は教えている。しかし、隠ぺいを支持した田中氏を牧師職に留まらせる教会に、自浄作用はあるだろうか。自浄作用があるならば、辞任ではなく解任がふさわしい。なぜなら、田中信生氏や興譲教会から被害者たちに謝罪がないからだ。興譲教会は、なお、人を集める田中信生氏を必要としている。教会が田中氏問題を正式に認めたら、教会は立ち行かない。教会の組織防衛と「闇」を知る断ち切りがたい人間関係が、今も「すばらしい牧師」「東北一の教会」という剥げかかった看板を飾り続けている。』

ちょっと長い引用でしたけども、これはもちろん公に出されているブログであります。この村上密という人は名の知れた人なので、私がブログに書くのとは訳が違う影響力があるわけです。彼は心理学を駆使して、自分を愛することという心理学を、御言葉を使いながら、キリスト教っぽくアレンジしながら、多くのクリスチャンたちを魅了してきたわけです。自己啓発セミナーとか、成功哲学セミナー、カウンセリング、ヒーリングといった活動をして、多くの人たちを集め、各地で道場も開き、トータル・カウンセリング・スクールといったところでも主宰を務めているわけです。まあ、そこでもこういう事を謳い文句としています。

『豊かな人生の条件は良いセルフ・イメージを育てることです。現代人は与えられた役割や人からの評価、また世の中の価値観などに縛られ、本当の自分に気が付かないものです。あるがままの自分を発見し、その自分をこよなく愛する時、未来に向かって自分を最高に生きることが出来ません。』

こういう言葉を聞くと心が引かれるわけです。でも、そこには闇があるということも覚えて頂きたいと思います。田中信生氏のその名前を私はここで挙げましたけれども、これはもちろん録音されてインターネット上にも上がってくるわけです。で、これを聞いた人たちはどう思うのか。彼の支持者たちは、彼を尊敬する人たちはどう思うのか。彼の教えを本気で正しいと思って信奉している人たちはどう思うのか。想像は付きますけれども、でも敢えてT牧師という言い方をせずに田中信生とはっきりフルネームで述べたのは、パウロのこの手紙の中にも、テモテへの手紙の中に、例えば前回見た**第二テモテ 2:17**には『彼らの話は癌のように広がるのです。ヒメナオとピレトはその仲間です。』**第一テモテ**の方でもパウロは実名を挙げています。で、また**第二テモテの 4章**の所にもパウロは実名を挙げています。実名を挙げて彼らの具体的な教えを列記して、注意するように警告を与えているわけです。ミスターTでは誰のことか分からないわけです。「ミスターTが、何か聖書から外れたような教えをしているらしい。」では不明瞭なわけです。でも、実名を挙げられて、実際の教えを、どこがおかしいのかということをお伝えされるならば、信徒たちは警戒するわけです。まあ、そのことを牧会者として私も行なっているところでもあります。ただ田中氏という人物を扱き下ろす。ただ彼を個人攻撃して、彼のミニストリーを台無しにするようなことを、今ここで意図しているのではありません。ただ正直申し上げると、これは聖書に書かれている通り、自分を愛するという最も危険な教えを説く危険人物と言って良いと思います。彼がイエス・キリストを個人的な救い主として信じ受け入れているということは信じたいところでもあります。すなわち彼が本物のクリスチャンであって、いわゆる偽預言者とか、偽牧師だというふうには思いたくないところはあります。私も彼の教えを実際に生でも聞いていますし、彼の本もたくさん読みました。一世風靡していた時代、よく知っ

ています。一緒に働いたこともあります。ですから敢えてこの事を言っておきたいと思います。聖書をろくに知らない人たちは、すぐに耳障りの良い教えに耳を貸して、そして心を奪われてしまうものであります。霊的に未熟であればあるほど鵜呑みにしてしまうわけです。でも私たちはそうであってはなりません。成熟したクリスチャンを目指し、パウロが手紙の中で私たちにも警告していることを受け止め、そして勧めている通りに私たちも応答すべきであります。まあ、そのことを踏まえながら今日は特にこの**第二テモテ 3:2**の“自分を愛する”というこの教えについて、具体的にこれがどのような形で教会の中に入り込んでしまっているのか、前にもこのことは皆さんに、MGFのメンバーであればもう何度も聞いていると思いますが、でも敢えて今日はそこがテキストなので、もう一度お伝えしておきたいと思います。で、皆さんもただ教えを聞くだけではなく、聞いたことをちゃんと伝えられるようになって頂きたいと思います。「ああ、そうなのか。」で終わらないで欲しいということです。むしろ盲目な人たちがいるわけです。自分を愛することがまるで聖書の教えであるかのように信じきってしまっている人たち、信じ込んでしまっている人たちがあって、彼らもまた残念ながら闇へと落ちてしまうということ。そのことも私たちは憂うれいでいるわけですので、是非その人のことを愛しているならば、その人が傷つこうと、ムカつこうと、嫌がろうと、伝えて頂きたいと思います。パウロが言う通り、愛をもって真理を語るということ。

で、この自分を愛するという心理学から始まったこの教えが、どのように聖書の言葉とタイアップされて教会の中にあたかも聖書の教えであるかのように説かれるようになったかと言いますと、『あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。』という言葉が聖書にあります。これは聖書をまとめる、聖書の教えとは一体何かということを一言で言うならば、という時に使われる言葉です。ガラテヤ人への手紙でもまさに律法を一語で表現するならば、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』これは**レビ記 19:18**の聖句であります。で、この言葉は当然聖書の要約そのものであるもので、新約聖書の中には8回も引用されているんです。例えば**マタイの福音書 5:43**、同じく**マタイ 19:19**、**22:39**、**マルコの福音書 12:31**、**ルカ 10:27**、**ローマ 13:9**、**ガラテヤ 5:14**、**ヤコブ 2:8**。いかに重要な聖句であるか、もう分かるかと思えます。イエス・キリストご自身も引用しているんです。パウロも引用しているんです。ヤコブも引用しているんです。で、その引用元となっているオリジナルのその**レビ記 19:18**を開いて頂きますと、実際にはそのフルバージョンがそこにありますから、見て頂きたいと思えます。そこには『復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは主である。』と、これがフルバージョンです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』というこの命令の前提は、『復讐してはならない。』というものです。神ご自身が、人の罪、人の不義、人の不正、人の損害、被害。これに対して復讐して下さる、報いて下さる。であるから、あなたのすべきことは復讐ではない。あなたのすべきことは隣人を愛することであると。結果的にあなたはもはや自分で復讐する必要がないので、全部神様に一任出来るので、あなたは神の仕事を奪うことなく、隣人を愛することがあなたの仕事であって、それに専念するように、専心するようにというのがそこでの教えであるわけです。では、どのように隣人を愛するのかというと、“あなた自身のように”とあります。“〇〇のように”という関係副詞は、方法だとか、やり方を表します。すなわち、あなた自身を愛する方法で愛しなさい、というものです。私たちは己をおの自ずと愛してしまうものです。自分を自然に愛してしまうものです。よく皆さんにお話ししますが、自分の写っている集合写真を見ると、真ま先にあなたは誰を探しますか。当然自分を探すわけです。自分以外の者を先に探すという事は、滅多にないと思えます。先ず自分に関心が向くわけです。どんなふうまがに写っているのか。髪型とか、表情とか、目を閉じていないかとか、いろんなことを気にするわけです。私たちは自分自身に一番関心があるわけです。これは紛まがいもない事実、絶対に否定できないことです。だから、それと同じように隣人を愛しなさい。同じやり方で愛しなさい。それが、隣人をあなた自身のように愛しなさい、という意味であります。パウロは誰でも自然に自分自身を、特に自分

の体を^{いたわ}らっているものだ、と言っています。これはエペソ 5：28～29 で述べているところです。『²⁸夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。²⁹だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。』パウロによれば、自分を愛するとは自分の体を愛し、これを育てることだと言っています。よく「私は自分のことが嫌いなんです。」自己嫌悪に陥っている人がいます。心理学ではそれを、セルフ・イメージが低い、低セルフ・イメージだと言います。だから、「セルフ・イメージを上げて、もっと自分を愛すれば、もっと人との付き合いも人間関係もうまくいくようになる。」と、そういうことを田中信生氏も言うわけです。でも、聖書はそうは言いません。自分を愛するとは、自分の体を愛し、これを養い育てることだと。人が病気でもなければ、誰から強いられなくても自分に食べさせますし、自分の好きなことを自然に求めたりします。まあ、ストレス下では、当然暴飲暴食、食欲減退、または飲酒や喫煙といった有害な行為に走る場合もあります。とにかく自分のためなら、特別意識せずとも、すべきことを自然に行なうわけです。自分を愛する愛というのは、当たり前に関心する自分の世話をするというものです。ですから「私は自分のことが嫌いなんです。」と言う人がいて、自己嫌悪に陥っている人がいても、彼らは結局は自分のことばかり考え、自分のことばかり主張し、やっていることは自分のためにすべてやっているわけです。ご飯も食べます。食べたい物を食べ、飲みたい物を飲み、やりたいことをやり。自分が嫌いなら、なぜそれをするんですか。

マルティン・ルターは、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という聖句を、次のように説明しています。「自分を愛するのをやめて、隣人を愛しなさい。自分を愛する以上に隣人を愛すべきである。人間は罪人なので誰もが自分を愛しすぎている。だから自分を愛するその偶像崇拜的な愛を捨てて、隣人を心から愛しなさい。」そうコメントしています。ただし、「自己愛はすべて歪んだものであり、神を愛するとは自分を憎むことである。」といった教えは極端であります。自分を自然に愛すること自体には、何ら問題はないわけです。隣人をあなた自身のように愛すると。それは聖書も認めているところです。それが罪だとは言っていない。それは当たり前だと言っているわけです。自分を自然に愛すること自体には、問題はありません。神様から頂いているこの体を、労り、養い育てるのは、これは大事なことです。ですから、節制したり、健康管理をする。体に有害なことをしない。私たちの体は、神の宮と呼ばれています。ですから、神の宮を敢えて破壊するような行為を、私たちは避けるわけです。不摂生とか、暴飲暴食とか、アルコールの摂取、ニコチンの摂取、麻薬の摂取。クリスチャンはそういうことを避けるわけです。なぜならば、自分の体も、もはや自分のものではないからです。これは買い取られた主のものだからです。だから私たちは自分の体をもって、主の栄光を現しなさいと言われていているわけです。酒を飲みながら、神の栄光が現れるならば、じゃんじゃん飲むべきです。タバコをプカプカ吸いながら、神の栄光が讃えられるならば、私たちはどんどん吸うべきです。でも、そうじゃないならば、やめるべきだというのが聖書の主張であります。体を労り、愛する。これは健全なマインドであるならば、私たちは自然にそれをするわけです。不健全な人は、平気で自分の体を痛めつけるわけです。ルターは少なくとも人は健全にせよ、または不健全にせよ、病的にせよ、自分を愛していることを前提に話しています。「自己愛は追及されるべきものではない。なぜなら、自己愛は現実にそこにあるからだ。」と言った人がおりますけれども、的を射ていると思います。自分のことが嫌いだと言いながら、結局自分のことばかり、自分の願望・欲望を満たすことばかり考えているわけです。人のことよりも自分のことに関わり合っている。自分のことに囚われてしまっている。結局は、自分、自分、自分、自分です。人は自分を愛していないので、隣人を愛することが出来ないと主張するのが、自分を愛する心理学というものです。それが田中信生氏の説いている教えであります。

「私たちは隣人を愛するためには、先ず自分自身を愛することを学ばなければならない。自分を愛して

いない者が、どうして隣人を愛することが出来ようか。世の中には自分を愛していない人たちが大勢いる。多くの人は自分に落ち込み、卑屈になってクヨクヨしている。自信喪失、低自己像、自己愛に欠けているんだ。」

と分析します。で、これは神を知らない、聖書も読まない心理学者たちの意見で、でもこの意見がそのまま教会の中にも入り込んでいるわけです。キリスト教的に少しアレンジされて入っているわけです。そして、こう続くわけです。

「互いを愛し合う愛が足りないのはなぜか。彼らは一人ひとりの自分自身を愛する愛が足りないから、隣人をも自分と同じように愛することが出来ないからだ。(と説明します。)自分を愛すれば愛するほど私たちは隣人を愛することが出来るようになる。自分をもっと愛しなさい。自分をもっと高く評価しなさい。あなたの自己評価は低すぎる。セルフ・エスティームが必要だ。」

というメッセージであります。これが教会や、キリスト教団体、トータル・カウンセリング・スクールと、田中信生氏の主催するような道場でも説かれているようなところですよ。で、残念ながら神学校でもこの教えは教えられているんです。神学生たちもこの教えを学んで、牧師になったらそれを教会で信徒に教えるわけです。まあ、そうしたところでは、現代社会における愛の欠如という問題は、実にセルフ・イメージが低いということから出てくる問題であると、結論づけられます。

「学級崩壊しているのは、子供たちの自身に対するセルフ・イメージが低いからだ。自分を愛せなくなっているからだ。だから、うまく人間関係が出来ないと、営めないというわけです。だから私たちは自分自身についてもっと高い評価を持つ必要があります。そうすればもっと愛情もって豊かな生活ができます。(と、約束するわけです。そう教えるわけです。)いつも自分に^{みじ}惨めな思いをし、自分を嫌っている人が、どうして自分を愛するように他の人を愛することが出来ようか。そのような人は他の人から愛を受けていても感じる事が出来なくて、他の人の自分への関心を要求するあまり自己主張が強くなり、結局人間関係がうまくいかなくなる。また自分の低いセルフ・イメージから神様を押し量るので、神様の大きな愛や恵みに気付くことが出来ず、神様を小さいもの、無力なものにしてしまう。だから先ず自分を愛することから始めましょう。」

こういうことを牧師が言うわけです。実にまことしやかに聞こえると思います。“自分を愛すること”は、心理学の教えであって、聖書の教えではありません。第二テモテ3:2にハッキリ書いてあります。これは私たちが避けなければならない教えです。自分を愛する者。5節に『見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を(何と書いてありますか。)避けなさい。』と書いてあります。受け入れてはいけないんです。“避けなさい。”と書いてあります。カウンセリングにおいて、低セルフ・イメージに悩む患者に対して、セルフ・イメージを高くする、自分を愛することを強調する、いわゆる自分を愛する心理学。これは日本ではいまだに隆盛を極めているようですけれども、どちらかというところだと今はもうピークを超えているところだと思いますが、ドイツの心理学者のエーリッヒ・フロムという人が、フロムと言えば分かると思います。このフロムによれば、自己愛とは、自己中心性・ナルシズムとは正反対のもので、自己の完全性を保ちながら相手とひとつとなる心。他者に対して積極的関心と配慮を含む、と説明します。だから自己愛というのは、ただのナルシズムとは違ふと。自己中とは違ふと。人は、彼らは言い訳っぽく言うかもしれませんが。でも、現実はどうでしょうか。裏腹にこの自己愛の高い

強調面は、自己中心性とナルシズムに帰着してしまう。これが実情であります。これが聖書で言うところの、人間の本性に深く関わる原罪という問題です。原罪のなすところ、original sin です。精神医療の現場でナルシズムが最大の問題となっているという。自分を愛する心理学が、問題の解決の核心を突いていない証拠と言えると思います。実際に 80 年代、90 年代のアメリカの教会では、自分を愛するこの心理学が一世風靡しました。信仰と心理学の融合というものです。まさに混淆宗教のようなもの。これを当時はサイコバブルと言いました。サイコというのが心理学です。心理学バブル、サイコバブル、または、それはキリスト教に取り入れられたので、キリスト教化心理学とか、心理学的信仰などと呼ばれていました。でも今では、アメリカではその危険性とその弊害が判明して、^{すた}廢れる傾向にあります。アメリカで流行ったものは、日本に必ず 10 年後に上陸し、そして時代を私たちは 10 年隔てて、その結果も刈り取ることになるわけです。アメリカで隆盛したものが、今アメリカにどのようなダメージを与えたのか。教育現場でセルフ・エスティームがもてはやされて、今のアメリカの教育現場がどうなったのか。私たちは幸い反面教師がたくさん与えられているので、^{むやみやたら}無闇矢鱈に流行したからといって飛びついてはいけないことぐらい分かるわけです。ちょうど日本に入り出す頃に、もうアメリカでは廢れているんです。それを見れば分かるわけです。ああ、これは手をつけてはいけない、受け入れてはいけないものだ、と幸いアメリカがハードレッスンを受けてくれておりますので、私たちはそれを反面教師として受け取ることが出来るわけです。にもかかわらず、多くの人たちはこの惨状を見ていません。この現実を見ていません。流行した耳障りの良いその教えにただ闇雲に飛びつき、吟味することなく鵜呑みにして、そして必ずそれは闇となって、弊害となって、日本の教会も、日本の社会も、日本の教育現場も、襲うことになると思います。結局百害あって一利無しということに気付くようになります。でも、その時には、もしかしたら遅すぎるかもしれません。

で、この自己愛というものの危険性についても述べたいと思います。自己愛、パーソナリティ、これは現代社会の本質的問題だと言われております。残念なことに教会はこの心理学の手法を導入することでナルシズム、これを助長してしまっております。^{ちまた}巷で流行っている自己啓発セミナー、自己実現のアプローチを用いてイエス・キリストが説く十字架の御業、自分を捨て自分の十字架を負ってイエスについていくという弟子道。これを無効なものにしてしまっています。聖書によれば、イエス・キリストによれば、人の方法は先ず得ようとします、ゲットです。でも、神の方法は先ず死ぬことです、失うことです。これが逆説的真理であります。聖書は自己の死、自分の死。この世は自己を生かすという正反対の方向性であります。神の方法は常に人にとっては逆説です。大抵あなたの肉が良いと思うこと、それは神の目には良くないこと、間違っていること、正しくないことになるわけです。分かりやすいですけども、それが事実であります。こうして心理学、自己啓発、自己実現などは、まさにヒューマニズム、人間中心、人間礼賛ということです。またはニューエイジ的な価値観に基づくもので、お互いの肉を気持ちよくして、お互いの自己愛を増長する傾向にあります。だから危険極まりないのです。

そして、聖書の中には『自分を愛しなさい』という命令は 1 つも書かれておりません。マタイ 22 : 35 ~ 40 に、1 人の律法学者がイエスを試そうとしています。『³⁶「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」³⁷そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』³⁸これがたいせつな第一の戒めです。³⁹『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。⁴⁰律法全体と預言者が、この二つの戒めにかかっているのです。』でも、多くの教会では、この自分を愛するという心理学を取り入れている教会では、「この中に 3 つの戒めがある。」と勝手なことを言うわけです。でもイエスははっきりと「二つの戒めだ。」と言っています。それは言い換えれば、“全身全霊をもって神を愛すること”、“隣人を自分自身のように愛すること”、この 2 つです。ところが田中信生氏の教えによれば、「もう一つ 3 つ目の戒めがある。それは

自分を愛することである。」でも聖書を読む限り、どこにもそんな命令は書かれていません。「戒めは3つではなくて、2つだ。」とはっきりイエスは言われているわけです。

また、ルカ 10:27 『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。これは1節の中に2つの戒めがタイアップされています。で、このルカ 10:27 の原文によれば、神を愛する愛と隣人への愛は繋がられています。ですから直訳はこうなります。『愛しなさい。あなたの神である主を、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、またあなた自身のようにあなたの隣人を。』となります。“愛しなさい”という動詞は、“神”にも“隣人”にもかかっているんです。愛する対象はあくまで神と隣人であって、ここには自分が入っていないんです。ですからルカ 10:27 では、愛しなさいという命令は、神と隣人に対してのみとハッキリ原文では分かります。『愛しなさい。あなたの神である主を、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、またあなた自身のようにあなたの隣人を。』で、終わるわけです。実際のところ神を愛することは、隣人を愛することでもあるということ。また、マタイ 5:43 ではイエスの言葉として『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。』と。イエスはここで『自分の隣人を愛し』というフレーズの中には、『あなた自身のように』という部分を省いて引用しています。なぜならば、自分を愛することは取返して命じられるまでもないこと、大前提だからです。『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と。聖書に書かれていないようなことを、さも聖書に書かれているかのように、さもそれが神の命令であるかのように、聖書の重要な教理であるかのように教える。これは違った教えです。これは悪霊の教えです。これは明確に異端であります。

自分を愛する心理学の問題、さらに踏み込みたいと思います。そもそも精神分析、精神療法の方法はあくまで人間の魂の領域の学問であります。医学は一般的には肉体の領域を扱います。でも、精神分析、精神療法の場合は、人間の魂の部分も扱います。まあ、最近ではこの肉と魂（まあ、精神と言って良いと思いますが）、これは連動していると捉えます。WHO（世界保健機構）もこのことを広く世界に教えているところです。肉体と魂、昔から日本では「病は気から。」と言われている通り、肉体と魂・精神には密接な繋がりがあがる。連動しているということです。最新の医学をもってしなくても、もう昔の人はそのことを知っていたわけです。精神と脳の関係も重要視されています。基本的には精神分析、精神療法は、魂をいじくって修理しようと試みるのですが、神の方法は魂ではなくて、死んでいた霊を生かし、霊との相互作用の中で魂を整えるというものです。聖書によれば、人間は神のかたちに造られました。で、神は三位一体の神なので、人間もまた三位一体的な存在として造られました。つまりそれは、霊と魂と肉という三位一体であります。ところが、これらの学問、精神分析、精神療法の領域では、魂の領域のみです。そしてそれを魂と肉との相互作用を取り扱っているだけで、霊的要因、つまり神との関係とか、罪の問題、特に原罪の問題、これを完全に無視しているわけです。

神の問題解決法というのは、単純明快に十字架による古い自分の死というものであります。これはローマ 6:6 『私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減り、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。』また、ガラテヤ 5:24 にも同様のことが書いてあります。『キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。』ですから、この神の問題解決法は、十字架による古い自分の死であるということが分かります。

それとは対称的にこの世の学問、精神分析、精神療法、心理学は、自分（つまり古い自分）を死なそうとするのではなくて、生かそうとするものです。全くの反対だということです。真逆です。肉を生かそうとする。人は何でも自分の何かを失いたくないものです。自分を失いたくない。自分の過去だとか、自分の積み重ねてきたもの、自分が築き上げてきたもの、自分の一部と言われるもの、自分の大好きなもの、

自分のこだわっているもの、自分の思想、自分の立場、自分の哲学、自分の価値観、「自分の、自分の」というもの、それを失いたくないものです。そのため精神分析やサイコ・セラピーなどで、またはニューエイジやヒューマニズムの考えと結びついて、今日巧妙にキリスト教会の中にも入り込んでいるわけです。自分を捨てたくない人、自分の十字架を負いたくない人、自分の何かを失いたくない人は、こういった教えに飛びつくわけです。最近ではヒーリング（癒しのことです。）、また自己啓発セミナーなどが流行して、福音の核心（十字架におけるキリストとともに死ぬというその核心）を避けて、「人は皆神の目に高価で尊いから、互いの肉を気持ちよくして、お互いに自分自身を愛する愛をもって、愛し合ひましょう。」という傾向が強まっているわけです。これこそまさに原罪のルーツです。創世記 3：6（『そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。』）に、善悪の知識の木の実の特徴として、人の目に慕わしく見える、「これは聞こえが良い。」すぐ飛びつきたくなるものです。「自分を捨てなくても良いんだ。ありのままが良いんだ。自分を愛することが1番なんだ。自分、自分、自分、自分。自分を死なせなくても良い。自分の肉を否定しなくても良い。」これが罪の誘惑だったわけです。ありのままの自分を受け入れ、自分を尊いとする、セルフ・エスティームは魂の領域には実に魅力的です。でも結果、魂はどんどん活性化していきますが、その魂の活性化というのは自我を肥大化させてしまうだけのものです。結局は自分なんです。自分がどんどん大きくなるだけです。聖書の教えと心理学の教えの違い、もう皆さんこれまで聞いてきて段々分かってきたと思います。それはまさに相入れることのない、相反するもの。水と油、真逆のものだということです。でも、サタンは悪霊を使って、その鮮明な違い、光と闇の違いをぼやかして、グレーな形で私たちを盲目にし、騙そうとし、そしてこれらの教えにクリスチャンたちが騙されることによって、1人でも多くの者を道連れにしようとするものであります。クリスチャンでも対人関係や仕事のことなどで傷つきますと精神分析、交流分析、自立訓練法、行動療法、らいだんしゃちゅうしんりょうほう 来談者中心療法。この来談者中心療法というのは非常に日本でももてはやされていますけども、その創始者のカール・ロジャースと言う人は、聖書が教える罪というものを認めなかった人です。自分たちの欲求を満足させるために、新しい倫理というものを考え出す人たちがおります。例えば同性愛というのものも、「男同士愛し合ったって、女同士愛し合ったって、別に構わない。ただ社会がそれを認めたくないだけだ。」という考えです。そういう考えのもとに来談者中心療法というものが編み出されたんです。で、これが学校現場では、スクール・カウンセラーとかによって生徒たちに施されているものであります。でも、それを始めた人は、聖書が教える罪というものを認めなかった人です。自分たちの欲求を満足させるためには、新しい倫理を作り出したって構わない、という考えの人なんです。で、これにほどを絆されてクリスチャンたちも心理療法、心療内科とか、精神の神経科とか、そういったところもさまよ彷徨ったりしてしまうものであります。まあ、そのような姿をイエス・キリストがご覧になったらどう思われるか、いつも私は考えさせられます。

イエスは言われました。『自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。』（ルカ 9：23～24）これを原文に忠実に訳したいと思います。“自分を捨て”これは不定過去なので“自分を捨て始めなさい”、“日々自分の十字架を負い”これはやはり不定過去なので“負い始めなさい”、“そしてわたしについて来なさい”これは現在形です。“自分のいのちを”原語は“魂”です。『自分の魂を救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのち（直訳は魂）を失う者は、それを救うのです。』先にも述べた通り、この世の方法はまず得ようとし、ゲットしようとし、それに対して神の方法は、まず失うものだということ。繰り返しますけれども、現代社会の病理は自己愛のパーソナリティーであります。この世も、キリスト教会も、自分。私が、私は、私に、私、私、私です。果てしない自分、私

の訴えに満ちあふれています。私の心の傷、私の悩み、私の問題、私の、私の、これしか口から出てきません。でも、真の癒しを得るためには、真の命を得るためには、その訴えと主張に満ちている自分自身を先ず引き降ろさなければいけないんです。一旦降ろして、自分を脇において、それがイエスが言う“自分を捨てる”ということです。十字架におけるキリストと共なる死に与るということ。これが肝要です。これが秘訣です。これが絶対不可欠なことであります。そうしない限りは、あなたは皮肉な目に遭います。自分の魂を救おうとして、自分自身を最後には失うんです。命には与れないんです。

聖書において自己否定、そして神を愛すること、隣人を愛することが、シンプルな命令として勧められています。一方で、この世の教え、世俗的な、肉体的な、人間中心のヒューマニズム。これは自己賞賛、自己愛が勧められています。聖書は、他者を助けることに力を入れます。世俗的ヒューマニズムは、自分を助けることに力を入れます。全部セルフヘルプです。自己啓発、自己実現、自己尊重。全部自己、自己、自己です。聖書は全部キリストです。キリスト指向です。世俗的ヒューマニズムは、自己指向です。矢印を頭の中に思い描いて下さい。矢印は自分ではなくて、キリストに向いているのがクリスチャンです。心の中の矢印が自分に向いているのが、それが肉です。それが、あなたの魂の1番願うことです。でも、その罪汚れた魂、肥大化した自我を、^{たくきつ}磔殺することによって、十字架につけることによって、その魂は自分から解放され、キリストに囚われるんです。肉に癒着するんじゃなくて、その魂は霊の方に癒着するんです。死んでもなくなる命の方に、その魂は癒着出来るんです。これが普段私たちが行っていることです。日々の選択の中で、自分というその魂、自我の部分が、肉の方によるのか、霊の方によるのか。常に行ったり来たり、それがいわゆる私たちのアップダウンとなるわけです。波となるわけです。常に霊の方に魂が癒着している間、寄り添っている間は、私たちは満たされています。安心してあります、平安があります、喜びがあります。でも、その魂が一度肉の方に引き寄せられて、肉と癒着すると、クリスチャンでも平安を失うんです。クリスチャンでも罪を犯し続けるんです。クリスチャンでも酒が止められない、タバコが止められない、麻薬が止められない、ギャンブルが止められない、過去の自分からまだまだ解放されずに、いつも自分、自分、自分です。自分が1番、自分が一番可愛い。自分が一番大事。神を愛するよりも自分です。隣人を愛するよりも自分です。そこから解放するために、わざわざイエス・キリストが十字架に掛かって命を、その尊い命を、罪汚れのない命を捧げて下さったにもかかわらず、この自己愛のパーソナリティ、この自己愛の心理学は、そのキリストのなされたことを全否定するんです。もっと言えば、そのキリストの救いの御業を台無しにしているんです。価値の無いものとしているんです。「別にキリストが十字架の上で死ななくても良かった。この自己愛の心理学の教えさえあれば、人間はいくらでも修理できる。塞いでいた心も、^{うつ}鬱も、対人恐怖症も、この心理学、自分を愛することによって解放される。不登校だった者も、引きこもりだった者も、この心理学によって、自分を愛することによって、セルフ・エスティームによって、解決出来るんだ。」と。これは、とんでもない神を冒瀆する悪霊の教えです。皆さんはそこまでは思っていなかったかもしれませんが、でもこれが聖書の主張であります。

聖書は自己愛をハッキリと禁止しています。それが今日のテキストなんです。**第二テモテ 3:1~2**です。『終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。』クリスチャンはよく承知していなければいけないんです。他の誰よりもです。そのときに人々は、まずトップリストとして“自分を愛する”ここから始まっていくわけです。これがその後が続くありとあらゆる社会的病理の最大の問題と言って良いと思います。自分を愛することから解放されれば、金を愛することもなくなります。大言壮語することもなくなります。不遜な者でない、神をけがす者でなくなるわけです。逆にイエスの教えを忠実に、厳粛に、真摯に受け止めた時、自分を捨て、自分の十字架を負ってイエスについて行こうとすれば、その人はイエスがおっしゃられた最も大切な教えを忠実に守り行おうとします。すなわち、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛する。そして隣人をあなた自身のように

に愛する。これだけに集中し、これだけを行います。そうするとその人は、当然自分を愛することよりも、神を愛することを選びます。自分を愛することよりも、若しくはそれ以上に他者を愛することを選びます。その人は当然金を愛することなんかしません。ここに出てくるリストは、クリスチャンとしては絶対にやってはいけないことばかりです。クリスチャンとは正反対の人たちのリストです。クリスチャンは絶対に自分を愛してはいけないんです。これはイエスの教えです。イエスが命がけで教えられた教えだと、言っても良いと思います。これはパウロに言わせれば、避けなさい、こういう人々を避けなさいと。避けなきゃいけないんです。世の終わりなると、こういう人々が私たちの周りにいっぱい現れます。隣に現れます。隣の教会に、こういうことを教えている教会が現れます。私たちの街に、トータル・カウンセリング・スクールができるわけです。私たちの街のキリスト教書店に、こういう本が並ぶようになるわけです。私たちの教会でこういう教えがセミナーとして開かれるようになるわけです。こういう人々を避けなさいと聖書は言います。自己愛をキリスト教の教理としてしまうような、教理化する危険性。これももう一度繰り返すようですが、強調しておきたいと思います。自己愛をキリスト教の教理化してしまう危険性です。まあ、これは自己愛のみならず、聖書に書かれていないありとあらゆる教えを、まるで聖書に書かれているかのように教えること全般に言えることです。すなわち自分の考えを聖書によって裏付けよう、権威付けようとする。これは大変危険極まりない行為であります。聖書の言葉を自分の都合に合わせてとしますので、完全に文脈から無視して濫用する羽目になります。場合によっては付けたそうとします。差し引くこともあります。で、ねじ曲げるといふ曲解に結びつくわけです。先に触れた通り、**マタイ 22 : 35 ~ 40**、そこには2つの戒めしかないのに、あたかも3つ目の戒め、“**自分自身を愛すること**”が命令されているかのように教えること。完全なる、付け足しです。これは絶対にやってはいけない行為です。イエスはここで2つだけの戒め、これを教えられています。全身全霊を持って神を愛することが最優先。先ず私たちが関心を向けるべきその先は、そのベクトルは、矢印は、神であって自分じゃないんです。先ず自分を愛さなければ、神を愛せない、隣人を愛せないというのは、これは悪霊の教えです。**申命記 4 : 2**にはこう戒められています。『**私**があなたがたに命じることばに、つけ加えてはならない。また、減らしてはならない。私**が**あなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を、守らなければならない。』また**箴言 30 : 6**には『**神**のことばにつけ足しをしてはならない。神が、あなたを責めないように、あなたがまやかし者とされないように。』田中牧師がまやかし者とされないように。彼の教えを取り入れて、日本全国の多くの教会の牧師がまやかし者となってしまっております。田中信生牧師が最も有名な牧師なので、彼の名前だけを取り上げているだけで、彼だけがまやかし者だと言っているんじゃないやありません。彼の教えを教会の中に取り込んでいる者ならば、そしてそれを何も考えずに鵜呑みにしている一般信徒であっても、それは皆まやかし者です。聖書で吟味しない良くない人たちです。ハッキリ言えば、悪い人たちです。悪霊の教えの風に吹きまわされて、その波にもたそぼれている人たちであるわけです。だから、特定の人を指差して、断罪して良いのではありません。もし、この中にこの自己愛の教えを、あるクリスチャンから聞いて、ある本を読んで、または心理学だとか、教育現場でそれを教わって、それをそのまま良いものだと思って自分も受け入れ、そしてそれを人に説いていたならば、その人はまやかし者です。聖書によれば、そうだとされているわけです。田中信生牧師だけがまやかし者ではないんです。

黙示録 22 : 18には『私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかす。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。』厳罰がここに明記されています。

この意味においても危険極まりないんです。非常にリスクです。自分に災わざわいをもたらすというものです。

そして、次の点として自己愛も自己嫌悪も同根の罪であるということ。「私は自分のことが嫌いなんです。大嫌い。死にたいです。だから、リストカットします。だから、自殺未遂します。だから、引きこもるんです。だから、不登校になります。自分が大嫌いだから。」自己嫌悪、これも自己愛と同じだと言って

いるんです。自己愛と自己嫌悪、これは同根の罪です。聖書ではそれは罪なんです。的外れなんです。自分に常に関心が向いていると、セルフ・コンプレックスに陥ります。これは自己愛の正反対と思えるかもしれませんが、ところが、自己愛も自己嫌悪も自己に過剰な関心を抱くという点においては、全く同じことなんです。ただ単に自意識過剰なんです。自分のことばかりなんです。自分のことでいっぱいなんです。人のことなど考えられないんです。単なる自己中です。もし他者のことが考えられるならば、そのような考えを持たない、そのような振る舞いをしないということです。自己愛の反対の概念は、自己嫌悪ではありません。絶対に誤解しないでください。自己愛の反対は、単なる自己への無関心です。すべての注意力が、自分に向けられていると、自己防衛と自己拒否に陥ります。「自分はダメだ。自分は敗者だ。負け犬だ。自分は失格者だ。自分はみじめだ。自分が可哀想。」という自己憐憫の言葉。これはプライドの裏返しです。自尊心と劣等感、これは表裏一体なんです。^{うらおもて}裏表であるだけです。自己愛と自己嫌悪は、自分に関心が向いているという点では同じだと。自尊心と劣等感は同じことの裏表なんです。すべての注意力が自分に向けられている。自意識過剰になっている時点で、同じことなんです。「自分はよりよく生きたい。偉くなりたい。向上したい。自分のスキルを上げたい。自分の価値を上げたい。自分のセルフ・イメージを上げたい。」これはセルフ・コンプレックスです。まさに自己に、自己に、注意と意識が集中している状態です。このような状態では、その注意は神には向いていないんです。常にベクトルは、矢印は、神ではなく自分です。もちろん、これは神を知らないクリスチャンでない人たちならば、神に向くベクトルがないわけですから仕方がないことです。ですから、彼らは心理学を必要とします。彼らは精神科を必要とします。心療内科を必要とするんです。私は、そうした心理学だとか精神分析学を、全否定するつもりはありません。ただ、神を知らない人たちは、もう他に術がないわけですから、自分の魂をいじくって、何とか自分の肉を気持ち良くする以外ないわけですから、気休めを得るくらいしか手段がないわけですから、そこにお金をかけ、時間をかけ、そこに頼りを置くのは、これは仕方がないことです。私はそういう人たちを責めることは致しません。でも、クリスチャンはどうでしょうか。

ただ、誤解がないようにもう一つ強調しておきたいことがあります。では、クリスチャンは一切心理学を応用してはいけないのか、一切精神科には頼ってはいけないのかと言ったらそうではありません。もちろん、クリスチャンの心理学者もあれば、クリスチャンの精神科の先生たちもおります。で、彼らも立派な信仰の持ち主であります。私は彼らのことを全然見下げているつもりはありません。クリスチャンの精神科のお医者さんがいたら、ノンクリスチャンの精神科のお医者さんにかかるよりは、当然そちらを勧めます。ノンクリスチャンにも勧めます。でも、クリスチャンに必ずしもすぐにそこに行って、薬の力を借りて、心理学の力を借りて、自分の魂を修理しなさいとは言いません。まずは、クリスチャンは真っ先にそのベクトルを神に向けるべきであると、ここは勧めます。でも、クリスチャンの中でも、先程精神と脳の関係にも相互作用があるということを言いました。脳の中の化学物質がうまく分泌されていない故に、健全な思考が持てない場合があるわけです。その人は本気で聖書を信じていても、神の力を信じていても、でも脳がそのような信仰の妨げをする。例えば、自殺をすることは、これは罪である。クリスチャンは分かっているのに、自殺という選択を当然しないわけですけども、でもクリスチャンでも自殺に駆られていく人たちがいるわけです。で、実際に自殺してしまった人たちが大勢いるわけです。じゃあ、彼らは救いを失ったのか、地獄に墮ちたのかと言ったらそうではありません。すべての罪がイエス・キリストの十字架の贖いによって赦されるように、自殺したってその罪も赦される。それは特別な罪とは思いません。他の様々な罪と自殺の罪も、私は何ら変わらない罪だというふうに考えていますから、どんな罪でも赦されるならば、自殺の罪も赦されることは間違いのないことだと思います。「それが分かっているのに自殺してしまうのは一体どういうことか。信仰がなかったのか。」とついつい私たちは思ってしまうかもしれませんが、長年クリスチャン生活を送ってくると、長年牧会生活を送ってくると、いろんなことが教えられます。聖

書を熟知しているのに、それが罪だと分かっているのに、例えば自殺をしてしまう。その時何が起きているかと言いますと、その人の信仰がおかしくなっていると言うよりも、その人の脳の中で、ちょうど肉体がバランスを失って不調を訴えて、そして健全に機能しないように、脳も不健全に動いてしまうことがあるわけです。思いの中ではそれが罪だと分かっているのに、脳が異常をきたしているのに、自分の信仰とは裏腹に、それとは全く真逆のことをしてしまうことがたまに起こるわけです。これは一般的とは言いませんけれども、そういうこともあるわけです。例えばクリスチャンでも病気になるわけです。これに異論はないと思います。それと同じようにクリスチャンは脳のバランスもやはり罪によって、罪の性質を抱えた脳も、これも体の器官の一部ですから、手や足が、内臓が病気になると同じように、心臓が病気になると同じように、脳が病気になることは、これは精神病という意味ではなくて、脳の血流だとか化学物質の分泌が異常になったり、それが健全に機能しなくなることによって思考や精神にも悪い影響を与えること。こういうことが起こりうるということ。それは、私はいろんな事例をこれまで見てきたので、考慮しているところであります。でも、中には「クリスチャンがそんな精神的に異常になるのはおかしい。信仰がないからだ。」とか、「そうになってしまうのは、これは悪霊にクリスチャンが取り憑かれたからだ。悪霊に取り憑かれているからそういう精神異常をきたすんだ。」とか、そういう短絡的な考えをして、結論付けてしまう人がありますけれども、それは慎重に吟味されなければいけないと思います。まずクリスチャンは悪霊に取り憑かれることは絶対にありません。神の宮に悪霊が聖霊とともに同居するなんてことはありえないからです。あり得るとするならば、その人が最初から救われていなかった、自称クリスチャンだったということが一つの可能性として挙げられます。で、クリスチャンは精神病にならないかと言ったら、そうじゃありません。ただ厳密な意味では、自己愛から精神病になってしまう人もあれば、自己愛は無いけれども脳の状態がさっき言ったようないろんな化学物質の分泌が何か異常なために、信仰は健全でも、自己愛などに陥っていても、それでも精神に感情に異常をきたして、そして普段まともに考えられない。その人には考えられないような言動に出てしまう。こういうことがあり得るんです。肉体が異常であるように、脳も異常なんです。だから、先走った裁きをしてはいけません。これはもう大前提として、皆さんは覚えて欲しいと思います。

で、話を戻していききたいと思います。よく誤解をされるので、ちょっと時間をかけてお伝えしましたけれども、この自己愛の問題。そこから私たちは救われてきたということをもう一度確認したいと思います。聖書によれば、アダムとエバは神の命令に反逆して罪を犯し、墮落した結果、主の御顔を避けて園の木の間に身を隠したという行動に出ました。それは、正に神との命の交わりが断絶されて、霊的な死の状態に至ったということを表しています。二人は罪を犯した直後、いちじくの葉っぱをつづり合わせて、自分たちの腰の覆いを作ったと言われていました。つまり、夫と妻、人と人との間に秘密を作り、一体性の代わりに、断絶の壁を作り、自己の意識の世界に入ろうとしたわけです。自分の世界を作ったわけです。裸で付き合えた夫婦なのに、お互いに隠さなければいけない、壁を作らなければいけない、自分の世界・プライバシーを持つとしたわけです。で、一番やってはいけないのは、神に対してこのプライバシーを持つということです。神から身を隠すことによって、本来神に向くべき意識を、自分の中に閉じ込めてしまったんです。幽閉したんです。本来一体化されるのは、神とまず一体化されるべきですが、神と一体化されない結果、夫婦という最も親密な人間関係の間にも隙間が出来てしまったわけです。壁が出来ちゃったんです。いちじくの葉っぱがそこに入り込んできてしまったわけです。で、人間の意識は自分の中に幽閉されてしまったんです。これが罪の墮落の結果です。この罪の墮落の結果、一心同体と言われる夫婦の間であってですら、秘密が生じるわけです。プライバシーがどうのこうのなんてことを最近夫婦の間でも言うようになりました。「夫の携帯を妻が勝手に見る。これは法律に反する違法行為である。プライバシーの侵害である。」法は、そう言うかもしれませんが、聖書はそう言いません。夫婦は一心同体ですから、秘密

など無いはずで、夫の携帯を妻が見る、当たり前のことです。妻の携帯を夫が見る、そんなのは当たり前のことです。でも、その当たり前のことが、この世の中では当たり前ではなくなっているわけです。罪が正当化されているわけです。それがまともだと、それが当然だと、それが自然だと言われているわけです。でも、神の目からは、それは異常なんです。それは間違いなんです。自己愛もそうなんです。この世では「当然、当たり前。それが相応しい。それが健全なものの捉え方だ。自分を愛せない者が、どうして隣人を愛せるか。」世の中はそれを当たり前だと言います。でも、世の中で当たり前、受け入れられて正しいとされていることが、必ずしも神の言葉と照らし合わせてそうであるとは限らない。神の目から見てそれが正しいとは限らないということです。神経症におけるセルフ・コンプレックスに囚われた状態。これはまさに最も顕著な現れです。そのセルフ・コンプレックス。それは聖書の言葉で言うならば、ただの罪です。精神科でいろんな病名をつけられるかもしれませんが、それはただの罪です。で、この罪の解決法は抗鬱剤こううつざいじゃないんです。薬物じゃないんです。これは、イエス・キリストの十字架の死と復活なんです。私たちのセルフ・イメージは罪によって歪んでしまったんです。これが原因なんです。この罪を取り除くことができるのは、根治出来るのは唯一十字架の死だけなんです。薬じゃないんです。聖書を否定するような心理学じゃないんです。人間の力だけを頼りにするようなヒューマニズムじゃないんです。精神科じゃないんです。アダムとエバのセルフ・イメージに両極端な歪み、二重の歪みが生じました。その一つは、上向きの歪みというものです。上向きの歪み、これは二人は神のようになろうとしたと。これが、セルフ・イメージの過度の効用です。度が過ぎた効用です。過度の効用。自分を高くしようとするもの。であると同時に二人は、罪を犯した直後、自分たちのしたことを恥ずかしくも思ったわけです。神のようになりたいと思いつつも、恥ずかしいと思う。全く真逆の感覚、状態に陥った訳です。彼らのセルフ・イメージはその時に否定的なものとなったわけです。言わばそれは下向きの歪みと言って良いと思います。上向きの歪み、それは二人は神のようになろうとした。下向きの歪み、それは自分たちのやったことが恥ずかしい、否定的なものとなったんです。肯定的なもの、否定的なもの。これは先に触れた通り、自己愛が肯定的なものならば、自己嫌悪は否定的なもの。これは表裏一体なんです。自尊心と劣等感。同じことの裏表なんです。上向きの歪みと下向きの歪み、これは同じことなんです。これが、もう聖書の最初の書物の中に既に書かれていたことなんです。近代になって、19世紀、20世紀になって、心理学者たちが、精神分析学の権威たちが発見したような真理じゃないんです。この真理は、もう昔からいにしへの真理、六千年も前からあったことです。アダムとエバは問題を開示して「私は罪を犯したので恐れしました。」と言う代わりに、「私は裸だったので恐れしました。」と言うわけです。「罪を犯したので恐れしました。」ではなくて、「裸だったので恐れました。」「病気なんです。罪じゃなくて病気なんです。私はこういう不幸な育ちをしたんです。幼児期に不遇な目にあったんです。虐待を受けたんです。夫に裏切られたんです。親からネグレクトされたんです。愛情をまともに受けてこなかったんです。いじめられたんです。だから恐れしました。」これが人間の原点です。これが下向きの歪みです。私たちはあるべき姿には程遠い自分である事に感じて、しばしば自分自身を見下し、軽蔑し、憎み、時には全く価値がないと思っています。いわゆる自己嫌悪に陥るわけですが、低セルフ・イメージに陥るんですけれども、しかしキリストの十字架の贖いによって、クリスチャンの内にはセルフ・イメージじゃなくて、キリスト・イメージが、つまり神のかたちが形づくられていくんです。人は皆、神のかたちに造られているはずなんです。神のかたちを無視して、自分のかたちばかりを求めようとする。これは罪人の傾向です。毎日の生活の中で私たちは神のかたちを求めるよりも、自分のかたちを求めます。セルフ・イメージばかりで、キリスト・イメージを求めようとはしません。これを助長しているのが、自分を愛する心理学です。コロサイ2:8では『あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。』だましごと

の哲学です。これに騙されてはいけません。注意しなさい。これは人の言い伝えであると。この世に属する幼稚な教えである。キリストに基づくものではないと。セルフ・イメージ、セルフ・エスティーム、自己尊重、自己愛。キリストに基づくものではありません。だましごとの哲学の中に自分を愛するというこの心理学が含まれているということを皆さんはしっかりと見て、認めていただきたいと思います。この心理学は人間の行動や精神活動を探索して、人間とは何かという問いに深く関わっていく学問であります。しかし、心理学に傾きすぎると、無神論的なヒューマニズム、心理学崇拜に陥る危険性が出てきます。キリスト教は科学的研究を否定するものでは決してありません。心理学や精神分析学を頭ごなしに「邪悪な学問だ。」と否定するものではありません。宇宙のあらゆる事実の最終的な分析は、聖書の神と関連づけられると考える、これがクリスチャンであります。ですから、聖書を額面通り神の言葉として文字通り信じてきた偉大な科学者、彼らのことを思えば分かると思います。ニュートンしかり、ガリレオしかり、ケプラーしかり、コペルニクスしかりです。そういった聖書を文字通り神の言葉として信じた人たちの中には、偉大な科学者も大勢いて、その彼らの探究心によって近代の科学の基礎が作られてきたと。そのことは否定できない事実であります。宇宙のあらゆる事実の最終的な分析は、聖書の神との関連で結論付けられなければならないということは、ローマ 11 : 36 でも言われているところです。『**というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。**』現在主流となっている心理学の学説は、あからさまに神を否定する思想から生まれたものであります。ヒューマニズムや、またはニューエイジ、オカルト的な世界観から作り上げられたものであって、人間を単なる機械のように扱うものであります。精神科医やカウンセラーの中には、信仰も精神的な病気の一つであって、治療に邪魔なものとする者もあります。まことにだましごとの哲学ではなくて、キリストに基づく科学であるならば、そこでは少なくとも自己愛は否定されます。なぜならば、キリストに基づくものならば、そのキリストご自身が自分を愛していなかったからです。イエスは自己中だったのでしょうか。自分のことばかり考えたのでしょうか。「自分は惨めだ。悲しい。辛い。痛い。」と言ったのでしょうか。「誰もが私を見捨てて行った。私はひとりぼっち。なぜ私はこんな目に、こんな理不尽な目に遭わなければいけないのか。十字架に裸で磔はりつけにされ、こんな辱はずかしめを受けて、こんな痛い思いをして。」自分のことを訴えたのでしょうか。自分のことを主張したのでしょうか。イエスが十字架の上でなんとおっしゃられたのか、クリスチャンは知っているはずであります。十字架の上ですら、十字架とはまさに人間としての最低最悪のセルフ・イメージのその姿です。裸で、全身リンチされ、ボコボコにされ、血まみれで腫れ上がっている、もはやそれが人間とは思えないようなそんな姿に成り下がって、しかも磔はりつけにされるんです。肉体において最大限の痛みを与えるそんな惨めな姿。これ以上の最低最悪のセルフ・イメージはないと思います。その中で、その十字架の上ですらイエスの関心事は自分ではなかったんです。まったく自分自身なんか微塵もなかったんです。すべては、その関心事は、自分以外の他者に向けられていたということ。ルカ 23 : 34 で『**父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。**』自分のことを祈っているのでしょうか。私たちは祈る時、普段誰のことを、誰の何のことを祈っているのでしょうか。苦しい時、どうでしょうか。早くこの自分の苦しみから、この縄目から、この困難、この試練から解放して下さい。この悩みから、この病気から、早く解決して下さい。自分の直面していること問題から。早くこの必要を満して下さい。この自分の必要を。この自分の悩みを。この自分の悲しみを。辛さを。痛みを。自分、自分、自分、自分です。イエスは 1 番つらい時なのに、自分のことは一言も口にしませんでした。むしろ自分を十字架刑にした死刑執行人たちの罪の赦しを乞うたわけです。彼らというのは、自分をボコボコにし、自分に辱はずかしめを与え、十字架の上に磔はりつけにしたその人たちのことです。で、その足元ではイエスのたった 1 つの持ち物、お母さんが手で縫ったたった 1 枚の衣服を、ギャンブルにかけて遊んでいたんです。目の前でイエスが血を流しているのに、彼らの罪のために辱はずかしめと痛みを一身に背負っているの

に。また神の罰、神の怒り、その呪いのすべてを、その裁きのすべてを、イエスが一身に負って下さっているにもかかわらず、彼らは、罪人たちは、その足もとでギャンブルをしているんです。肉を喜ばせているんです。誰がこのイエスの持ち物を手にするのか。自分のことしか考えてなかったんです。ゲットすることしか考えていなかったんです。自分の肉を喜ばせること。十字架のキリストが目の前にいるのに、その足元にいるのに、私たちは自分のことしか考えません。自分の仕事のこと、自分の家族のこと、自分の将来のこと、自分の、自分の、自分の、自分の。

で、さらにイエスは十字架上で自分のお母さんのマリヤを弟子のヨハネに託しました。イエスは長男でした。ヨハネ 19:26~27『²⁶イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子（ヨハネのことです。）とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます。」と言われた。²⁷それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます。」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。』自分のことばかり考えてしまう私たちですが、イエスは自分を死刑執行したその血も涙もないローマ兵士のためにとりなし、そして長男として先に逝ってしまう。母に、お母さんに、最大の悲しみを与えてしまう。その母のことを気遣って、長男としての責任を果たそうとしているわけです。自分のことではいっぱいはいっぱいはずなのに、他者のことを思うわけです。お母さんのことを思っているんです。家族のことを思っています。こうしてみるとイエス・キリストという方は、自己愛とは全く無縁の方だということは、ハッキリしていると思います。ですから自分を愛するということは、キリストに基づく教えでは全然ありません。この罪のないお方は、自分中心ではなくて、神中心の生き方をなさいました。罪とは自分中心の生き方をする。全く的外れな生き方です。キリスト教が目指すのは、自己否定とキリスト実現。この世が目指すのは、世俗的なヒューマニズム。異教が目指すのは自己高揚と自己実現です。相反するものです。まったく対称的なものです。クリスチャンが目指すのは自己否定とキリスト実現。ノンクリスチャンが目指すのは自己高揚と自己実現です。セルフ・イメージ、自己像の向上ではなく、キリスト・イメージすなわち神のかたち、キリストの似姿に変えられていくことが、クリスチャンの生きる目標であります。自分なんかどうだっていいんです。自分のセルフ・イメージなんかハッキリ言って、どうだっていいんです。自分がどう思われようと、どう扱われようと、どうだっていいんです。自分が悲しい、自分が辛い、自分が恥ずかしい、自分が痛い、そんなことはどうだっていいんです。そんなものに囚われない。そこから解放するために。自分に縛られないように、自分のその自我というイチジクの葉っぱで覆い隠す世界、自分で壁を作って自分の世界の中に閉じこもろうとするその世界。そこから私たちに解放し、引き上げ、そしてイエス・キリストのような自由な世界へ私たちに今招こうとされているわけです。人に何をされても、自分というものによって自分を意識しないで、自分を縛り付けしないで、そして自分という殻に閉じこもらないで、罪を犯すこと、的外れなことから、私たちは解放されて生きることが、出来るようになっていくんです。クリスチャンはもう自分にこだわらなくていいんです。クリスチャンはキリストに似る者なんです。ですから私たちがキリストのようになることを待ち望んでいきたいと思います。イエス・キリストが戻って来られる。その携挙の望みを抱く者は自分自身を聖くします。セルフ・イメージではなく、キリスト・イメージに変えられることを意味しています。私たちはキリストと同じ姿に変えられることを知っています。それが的を射た人生です。的を外した人生はキリスト・イメージではなくて、セルフ・イメージを追求する人生です。もしクリスチャンがこの自己愛の、心理学の、世俗の、悪霊の、教えに取り憑かれているならば、取り込まれているならば、完全に的外れだということです。そのままでは神が私たちに用意されている救いの喜びに与れないということです。この開放感、この自由、そこには至らないということです。

今日は予告通り**第二テモテ 3:2**の冒頭の“自分を愛する者”止まりで終わるということを行いましたけども、ただ最後にその続きの**第二テモテ 4:2 ~4**を最後読んでこの時間を閉じたいと思います。ちょっと先取りするようですけども。『²みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。

寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。(寛容という言葉は愛の定義のトップにあったと言いました。愛は寛容である。つまりここでは、“愛をもって真理を語りなさい”、ということを行っています。) ³ というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言うてもらうために(自己愛の教えのために、肉を喜ばせる教えのために、魂をいじくる教えのために)、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、⁴ 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。』これが今の時代です。違った教えが説かれて、空想話にそれている時代。その中であって私たちは、この神の言葉、真理に常に耳を傾け、そしてこの神の言葉が常に私たちの口から語られるようにしなくてははいけません。人がどう言おうと、世間が何と言おうと、有名な先生が何と言おうと、ベストセラー本に何と書かれていようと、トータル・カウンセリング・スクールで何を教えられようと、そうしたものに耳を傾けてはいけません。そうしたものに心を奪われてはなりません。それは教えの風です。ただ吹きまわされるだけ。それは波です。ただもてあそばされるだけであります。事実、そういう人たちを見てみて下さい。彼らは結局、一生涯カウンセリングを受け続けなければいけないんです。結局彼らはトータル・カウンセリング・スクールを卒業したところで、心理学から離れられないんです。

「真理は自由にする。」とイエスは言われました。『あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。』(ヨハネ 8:32)なのに、真理でないものは、逆にあなたを縛るんです。それがないと、生きていけないんです。そのスクールに行かないと、その道場に行かないと、そのセミナーに行かないと、常にその教えに触れていないと、常にカウンセリングを受けていないと、まともに生活できないんです。それは真理ではありません。真理は逆にあなたを自由にするんです。もう、そんなものは必要ないんです。真理はいくつもあります。聖書だけが真理です。聖書以外は、すべて真理ではないんです。偽りです、それは嘘です。聖書によらない教えは、すべて悪霊の教えだと聖書は断じています。もちろんこれは自分を愛する心理学だけのことを揶揄して、そこだけに矛先を向けて言っている言葉ではないことは、皆さんは了解していると思います。他にもいろんな教えがあるんです。今日は、たまたまテキストが、“自分を愛する者”というものであったので、これだけをクローズアップして、フォーカスを置いて語ったに過ぎません。他にもたくさんあるんです。それが当たり前だと思っても、それが当然キリスト教の教えだと、それが。聖書の教理だと思っていたもの、それがイエスの教えだと思っていたもの、いっぱいあるはずで、吟味しなくてははいけません。で、時が良くても悪くても、相手がどう思うと、御言葉の真理をハッキリと伝える必要があります。まずは、自分に対してそうして下さい。自分に真理のことばを語って、自分自身を解放してあげて下さい。縛られていたならば、解放されて下さい。もうそれは必要ない、それは聞く必要がない。もう、あちこちいろんなセミナーを、ハシゴしなくても良いんです。もう、そんな高い受講料を、何万円も、払う必要はないんです。もう、そんな薬代を払う必要もありません。是非、解放されて頂きたいと思います。で、私たちも解放された者として、私たちの周りの人たちに、この真理の御言葉を語ることによって、解放をもたらしていかなくてはなりません。今は終わりの時代、困難な時代です。簡単ではないと思います。激しい抵抗も予想されます。“狂暴”という言葉でも表されております。いろんな異常者、悪霊に取り憑かれたような、そんな人たちとも対峙しなくてはならないかもしれません。^{うつびょう}鬱病相手、統合失調症と診断された人相手、そういうケースもあるでしょう。もう自己中で、もう自己愛に完全にハマりきってしまった、そういう人たちを対象に話さなければいけないこともあるでしょう。でも、時が良くても悪くてもです。彼らがもし考えを変えないならば、その教えを続けていくようであるならば、そこには、聖書には何と書いてあるのか。『こういう人たちを避けなさい。』とあります。最終的には避けなくてははいけません。そのことも、まずは教えから避けていく必要があります。まずは教えから避ける必要があります。私たちは罪人を愛しますが、罪は憎みます。この悪霊の教えは、憎むべきもの、忌み嫌うべきもの、これを避けなくてははいけません。ただ、その教えを知らずに、盲目的に受け入れ、盲従し

ている、騙されている、マインド・コントロールされている、知らないでいる、無知な人たちもいっぱいいます。彼らは確かに的外れで罪人ですけれども、彼らは目が開かれる必要がある、真理によって解放される必要がある。騙されているならば、被害者かもしれません。彼らを私は「見捨てなさい。切り捨てなさい。」と言ってるんじゃないです。ただ、先ずはその教えから切り離さなければいけない。あなたが先ず避けなければいけない。自分に向けて真理を語ることによって、自分が真理の御言葉を学ぶことによって。その後、愛をもって真理を語る際に、彼らはひよっとしたら解放されるかもしれません。それでも解放されないで、頑固なまでに、あなたに反抗し、あなたの言うことを全く受け止めようとしなければ、『**見えるところは敬虔であっても、その実を否定する人たちを避けなさい。**』と言われているこの言葉に従わなければなりません。そうでなければ、対抗しないで、見て見ぬ振りをして、「それもあなたの考え。それぞれ十人十色、いろんな信仰があって、いろんな聖書解釈があって良い。」そんなことをあなたがやるならば、あなたも同罪です。見えるところは敬虔であっても、その実を否定しているからです。厳しい言葉をたくさん語りましたけれども、でもこれは愛をもって語る真理だということを、皆さんは知って頂きたいと思います。私に愛がなければ、私はここまでは言いません。「勝手に滅んで下さい。」それで良いわけです。「好きな教えを勝手に信奉して、やりたいようにやって下さい。」それで良いんです。でも私は牧師として、羊が病んでいる姿を見て、羊が迷っている姿を見て、黙っていられないだけです。可哀想でしかないと思っているだけです。何とかしてあげたいと思っているだけです。「別に人の羊のこと、関係ない。他所の教会のこと、関係ない。その羊がどうなろうと、私の知ったことか。」と言うのが、私の本音であるならば、私はこんなことを言いません。なぜならば、これを言うことによって私はたくさんの人に嫌われるからです。たくさんの人から非難を受けるようになると思います。今までもそうだったんですけども。でも、別に構いません。どう思われたって、私にはこのことが控えさせる理由にはならないと。このことが、私が愛をもって真理を語ることを妨害することに、歯止めになることにはならないと、私は言いたいと思います。どう思われようと構いません。人からどう評価されようと構いません。ただ単に私は聖書で何と言っているのか。そして、聖書を教える者として、責任を果たしたいだけです。そして、キリストの愛をもって、キリストことを宣べ伝えたいだけです。それが私の動機ですから、皆さんも同じ動機を持って、この教えを、今日のメッセージを、しっかり受け止め、バトンタッチして頂きたいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。